

## 「なる」ということ

大西 昇\*

## On the Japanese Word “Naru”

Noboru Ohnishi \*

The Japanese word “Onozukaranaru” represents one of the fundamental religious mentalities of the Japanese people.

This mentality has long been functioning in the life of the Japanese both positively and negatively.

The notion of “Onozukaranaru,” however, cannot be defined in a clear way; therefore, what we can do is just pursuing its footprints.

☆古代日本語としてはカタカナ、古代から現代に至るまでをおおう場合は平仮名表記にする。

(現代仮名遣いでは、「おのずから」「みずから」であるが、それらが古代語オノヅカラとミヅカラの後裔であることから、あえて仮に、「おのづから」「みづから」表記にした。)

## 【一】はじめに

人為(文化 Culture)と相対ないし対立相で意識化された「自然」(Nature)という明確な意識の在り方からくる表現と比べると、日本語の表現では、「自然」と人間の意識・意志・意欲の交渉は微妙で、明確な区別がつかない言語現象が多く見られる。

その最も顕著なことばは「なる」であり、古代語ナルが現代にまで生き延びて、「なる」が活躍する表現とその生活における実践は現役である。[\*1]

「おのづから」も「なる」も、記紀などに文字化され記録されるはるか以前から、生きて活躍してきたことばと想定できる。

そこで、「なる」の本来は「おのづからなる」であり、「おのづから」の本来は「おのづからなる」である、を基本の前提として、「なる」「おのづから」「おのづからなる」の三つの表現は、本来は同じ事態をあらわしている、という仮定から出発することにする。

[付] 〈〉の意味

日本人の根源的心性の特徴と見做せるものの一つを、「自然のみ」と仮説する[[九]において検討]。その理解内での事象を、総体的には、仮に「自然のみの世界」「〈おのづからなる〉の世界」と名付ける。同じことをまた〈自然〉とも表記する。この「自然のみの世界」の理解に属する用語は、〈〉記号で囲む。〈自然〉、〈おのづから〉、〈なる〉、〈おのづからなる〉などである。

この〈おのづからなる〉の世界について、概略は次の通りである。

「おのづからなる」という発想は、日本人の宗教心の一つの核となるもの、と考えられる。とりわけ、生き方の根源的契機として、生活の中で「生きて」働いてきた、と考

えられるものである。すなわち、自覚無自覚を問わず、生活の在り方の根源的形成力の一つとして、活動してきたのである。

ことばを変えると、それは根源的発想として作動していて、根底にあつて認識と感情の原型の一つとなっている。すなわち、日本人の根源的心性を形成してきた契機の一つである。

ただし、ここで誤解を避ける意味で、次のことを述べる必要がある。

この小論だけでなく、オノヅカラとナル、「おのづから」と「なる」に、日本人の根源的心性を追求してきたこれまでの拙論においても、それを「そのまま」肯定し推奨しようとの意図は全くない。[小論末の[付]も参照されたい]

## 【二】盆栽

前節で述べたように、「なる」はごく普通のことばであり、余りはっきりと意識されることは少ないことから、却って理解し難いところがある。そこで、「なる」と深く関連付けて言われることの多い「自然」という現代語の方から、先ず近づくことにしたい。と言って、この現代日本語「自然」も扱いやすいわけではない。ここにも重要な問題が伏在することは、以前の拙論で繰り返し検討してきた。しかし、次に比較的理解しやすいと思われる、具体的な例から始めることにしたい。少々唐突の感は免れないと思うが。

「つくる」の本来は「なる」であるとする発想、それはある精神圏においては、根源的発想となり得るものであり、その一つとしての〈おのづからなる〉の世界を、これから、いくらか見ていこうとしているのだが、この発想は、人為〔文化・文明〕は「自然」を目指すべきだとする思想を、

\* 東京工芸大学工学部基礎教育研究センター非常勤講師  
2014年9月24日 受理

創出する可能性がある。すなわち、文化の本来〔本来の姿〕は自然である、とする思想である。それは、そのまま、人間の本来は「自然」であるとする思想に通ずる。芭蕉の「造化にしたがひ、造化にかへれとなり。」〔\* 2〕のころは、その線上にある好例ではないか、と思われる。

この本来は「自然」、すなわち「自然のまま」〔[九]で検討〕という生き方の、身近な例の一つは盆栽であろう。

そこで盆栽について少々考えることにしたい。

うっかりすると、盆栽は小さな鉢の中に、本来ははるかに大きい植物を閉じ込めるのであるから、これほど不自然なことはない、との評価が生まれよう。しかし、盆栽が、本来、目指すのは、「自然の姿」「自然のまま」であり、盆栽の最終目標（理想）は「自然」に他ならない。小さな鉢の中に松を植える「不自然」をおかし、そのままその「不自然」を続けて「世話」をする〔人為〕。しかしその世話は、鉢の松に松風を聞く〔自然〕のが目標〔理想〕なのである。

不自然に不自然を加えると自然になる、というまるで数学のような〔マイナスにマイナスを掛けると「機械的に」プラスになる〕、よく見かける考えには、重要な条件が必須なのだが、忘れられていることが多い。すなわち、そうなるためには、「自然」が根底から求められていなければならない。盆栽も先述したように、不自然に不自然が加わると見られなくもないが、肝心要は「自然」が求められていること、すなわち「自然のまま」である。

もちろん盆栽においても、その本来を外れて、無理に「自然」を求めるような類の不自然が多いであろう。それで、「自然」ということをとりわけ強く意識し、針金を掛けたり、枝を無理に曲げたりすることを嫌う場合もある。これは意志ないし意識の、自意識的な努力は、不自然の場合がほとんど〔ことさら、はからい〕、という発想に通じよう。

また、「自然」を求めているころの証左に、盆栽に人工物を加えない、ということがある。盆栽が BONSAI として海外に普及したことからくるのか、人間や動物のフィギュアと称するものを盆栽樹の傍らに置く例が、見られるようになったが、これは本来を全く逸脱している。盆栽樹は不自然に小さくされていても、本物であって人工物ではない。

端的に言うと、盆栽の本来は、その「不自然」が最後には消えて「自然」となる姿である。

### 【三】ハチス

前節の盆栽からの植物の連想ではないが、この節では古代風土記のハチス（蓮）の記事について、少々見ていくことにしたい。

一般的な国語辞書では、「おのづから」「おのづから」の主要な意味は、「ひとりでに」「自然に」と説明されている。そこで、「おのづから」は、「ひとりでに」ある事態が起こる、の意味とする一般的理解から始めることとしよう。

しかし、結論を先に言うと、現在の「ひとりでに」とい

う表現には、〈自然〉の働き〔〈おのづからなる〉働き〕に対する考慮が、ほとんど見られないに近い。

「ひとりでに」とは、人間の手をかけないで、何もしないのに、ということであろう。付言すると、この「何」はその状況・文脈により規定されて、その具体的内容はそれぞれ異なる。

しかし、「何もしないのに」ある事態が起こるのには、それなりの理由がある。

それを大きく分けると、

1)「おのづから」と表現した人々には、「そうなるべき」理由が意識されている。

2) 表現者にも、理由は明確には意識されていないが、「おのづから」と感じられる。

どちらにしろ「理由」は存在する。当然、「おのづから」と表現させるものを感じていなければ、そのような表現にはならない。したがって、表現者にとっては、ここより主要な契機は、「何もしないのに」ではなく、そう表現する「理由」がある、ということの方と考えられる。つまり、その「理由」を表現するとき、「何もしない」ような表現法を取る場合があるのである。

したがって、「おのづから」の主要意味を「何もしない」と受け取るのは不十分であるばかりか、真意を失する危険性もある。とすれば、その意味を、よくあるように、現代語の「ひとりでに」や「自然に」とすることには相当注意を要する。「自然に」については、幾つかの拙論で指摘したので、詳しくはそちらを参照していただきたいが、現代日本語の「自然」は、それほど単純な意味内容でなく、また、なんでも入る袋のような便利なことばであるから注意が必要である。

次にこの事情を実例で見ていくことにする。

〔イ〕

「養老（やうらう）元年より以往は、荷葉（はちす）、自然（おのづから）叢（む）れ生ひて太（はなは）だ多かりき。二年より以降、自然失せて、都（す）べて莖なし。」  
出雲風土記 愛鹿郡 惠曇池

一見すると、現代日本語表現の「自然に」「ひとりでに」などの適例と思われる。そこでこの条をさらに見ていくと、次のような記事が続いている。

〔ロ〕

「俗人（くにひと）いへらく、其の底に陶器・甕（みか）・甕等（しきかはらども）多かり。古より時時人溺れ死にき。深き浅きを知らず。」

現存の文書からは、この〔ロ〕の部分が付された意味は明確ではなく、われわれは憶測するしか手だてがないが、〔イ〕の〈自然（オノヅカラ）生ひ、かつ、失せ〉た事実に対する、古代人の反応の底に、〔ロ〕の事実に対するころの姿勢をいくらか推測することは許される範囲内で

あろう。しかし、このころの姿勢を、現代の我々がいわば勝手に、「不可思議な思い」などの類の表現をもって、形容することは、厳につつまねばならないにしても〔※3〕、この時々死者のあった池で、かつて神事が行われたことのあった、という推察は、全く不可能ではない。

以上のように考えただけでも、このハチスの例のオノヅカラが、現代語の「自然に」「ひとりでに」では不十分であることが知られるであろう。先に触れたように、なによりも、現在の「自然に」「ひとりでに」には、「おのづからなる」自然の働きに対する、何の配慮も感覚も無いに近いのである。

これに比べて、次の報告〔少々古い資料だが〕に見られる人々のところには、そのような働きに対する「感覚」が伺える。

柳田國男によると（『先祖の話』七九「魂の若返り」）、甲州では、50年目の年忌に、片側を削って草木国土悉皆成仏などと書いた柳の幹を立てたものを柳塔婆といい、たまたま根づくことがあると、ほとけの生まれ替わった験だと思える風があったとされる。又、『遠野物語拾遺』に依ると、「墓場の上に柳や其の他の樹木が自然に生えることがあると、其の墓の主はもう何処かに生まれ変わったのだと謂われる。」とある。〔※4〕

比較的近いこの習俗にも、ハチスの条と同様な、森羅万象を、「なり行くもの」として受け取り、たとえ単純な形においてであろうと、その「なる」働きに高い価値を見だし、「おのづから」「自然に」「たまたま」などと表現した人々のところを、かすかにではあるが伺うことはできよう。

#### 【四】現代日本語「自然に」

前節の柳田國男の引用文に、「自然に」という表現が出てきた。もう一つ「たまたま」ということばを見るが、この場合は前者に通ずるであろう。そこで「自然に」という表現を手がかりにして、問題の所在をもう少しはっきりさせたい。その簡便な好例として、辞書の説明を見ることにする。岩波古語辞典 補訂版「基本助詞解説」の助詞「し」の説明に、以下の文章を見る。

助詞「し」は、

〈文末に、「大和し思ほゆ」「家し偲はゆ」など、自発の意を表す助動詞「ゆ」を含む語の用いられることが多いが、この場合も、「自然に思われてくる」「自然に偲ばれる」の意で、話し手の気持ちを自然な流れとして表現するもので、話し手の積極的・作動的な主張を提示するものではない。〉

辞書の付録の文法説明であるから簡便簡略は仕方がないとして、検討対象としては不適切、という意見もあろうかと思われる。しかし、辞書本体の語彙説明でも、以下に問題とした語句・表現は使われており、他の辞書類もほぼ同様の事情で、問題視せざるを得ないが、それ以上にもっと本質的な問題が、そこに伏在しているからである。

「話し手の気持ちを自然な流れとして表現する」という

ところなど、工夫が見られるが、これも「自然」という語に頼っている、という感を否めない。まして「自然に思われてくる」「自然に偲ばれる」などは、これでわれわれはよく「分かった」気持ちになっている。これらの「自然に」「自然と」「自然な」などの表現は、すらすらと頭というより心に入ってくる。しかしこれはわれわれにとって大きな落とし穴である。それは、「自然」ということばに「逃げて」いる、と言わざるを得ないようなところがあるからである。その証拠に、普段は何げなく使用しているそれらの意味を問われ、あらためて考えると、余り適切な答は見つからない。辞書の説明の一つ「ひとりでに」については前節でいささか検討したが、「作為なし」なども、どこまでが作為なしで、どこから作為になるのか説明は難しい、というより、日本語の表現として見て、結局説明できないかも知れない。現代日本語の場合に限っても、これらの表現・語句は、頭脳でよりもむしろ心で分かっていることなのかと思えてくる。

以前の拙論でも、くどいほどこれらの語群にこだわってきたが、そこで指摘したように、現代日本語の「自然」には、明治初期に *Nature* を自然と翻訳し、それが普及したために、*Nature* の意味内容が混入していて、「あいまい」な語に膨れ上がっているのだが、そのことは余り意識されていない。その原因の大きな一つは、おそらくこの「自然」という日本語に在って、さきほど触れたように、頭よりこころに入ってくる傾向が強いので、そこに区別意識の刃は働きにくいのである。

しかしながら、現代に生きる人間として、われわれは、この「自然」という現代日本語の内実を、原理の水準で明らかにし、自覚する義務がある。このままでは、何時までもあいまいなままに「自然」という現代語を使用して、分かったつもりでいる状態から抜け出せず、*Nature* 概念との「自律」した対話にほど遠い混濁した事態に陥ったまま、それに気づきもしない事態が続くことになる。これは、自らの「本心」から離れていることを意味しよう。

急いで付け加えると、本心を一時「忘れて」いるだけであって、決して失ってははいない。ただし「失う」危険にさらされていることも確かである。

#### 【五】イチクラ

前節で、日本語の「作為なし」の捉え難さに言及した。作為の範囲を明瞭にしにくいのは、日本語に限らないであろうが、とりわけ日本語では難しい、と言わざるを得ない。

そこで、資料を再度風土記に求めて、少し検討することにする。

「朝酌（あさくみ）の促戸（せと）の渡（わたり）」

東に通道あり、西に平原あり、中央は渡なり。則ち、筥（うへ）を東西に互（わた）し、春秋に入れ出だす。大小き雑の魚、時に來湊りて、筥の邊に駢駢き、風を壓し、水を衝く。或は筥を破壊り、或は日に腊（きたひ）を製る。



ここに捕らるる大きき雑の魚に、濱譚（さわ）がしく家  
闔（にぎは）ひ、市人四（よも）より集ひて、自然（おの  
づから）に鄺（いちくら）を成せり。」 出雲風土記 嶋根  
郡

このイチクラの条におけるオノヅカラ〔自然〕について  
少々考えてみたい。

この条の大半は、ここの浜に大小の魚が集まってくる、  
という記事である。そして最後に、市の成立を短く述べて  
いる。ただし、初めに釜の設置が語られてはいる。とする  
と、この古風土記の記事は、人々と大小の魚の「交渉」を  
語っている、との理解も可能な表現である。

岩波古語辞典では『名義抄』などを引いて「いちぐら」  
とし、平安時代に濁音化したものか、と推定している。こ  
の「くら」は、アメノイハクラ、ネグラ、アグラなどの「く  
ら」であり、「地面から離れて高くなった場所」を意味し、  
イチクラとは「市で、交換・売買するために物を並べる台」  
とする。

この辞典の説明を仮に借りると、イチクラは現代語の人  
事の範囲内である。古代人としても、もちろん、「人の為  
すこと」という意識はあったであろう。

では何故それに、記紀では「オノヅカラ」としか訓まれ  
ていない「自然」の字を使用したのか。この点を考えると、  
イチクラの条における「人の為すこと」は、今言の人為と  
はいささか異なる色合いを帯びているように感じられる。  
すなわち、「人」もその「行為」も、今言のそれらとは、全  
く異なる意識のされ方をしていた、と考えられるのである。

すると、現代の意識ほど、自然と人為が対立して意識さ  
れていない、という平凡な指摘に収まるのであろうか。だ  
が、「自然」の字を使用して、ミヅカラではなくオノヅカ  
ラと訓ませようとしたことからすると、いわゆる「自然」  
と「人為」が、この古風土記では、同一の「台」に乗っ  
ているかのように表現されている。

そこで、その表現を産みだしている発想からすると、こ  
の両者の意識をいわば乗せている「台」は、「人為」〔ツク  
ル〕をも包み込んだ「自然」の意識、つまりオノヅカラの  
本然的意識〔ナル〕である。すなわち、ある意識（台）つ  
まりオノヅカラの意識からすると、人為〔ツクル〕も単な  
る人為〔ツクル〕でなくなる場合がある、ということであ  
る。ここには、「自然」と対立的に意識された「人為」（文  
化）というような「意識の在り方」は存在しない。同じこ  
とを逆に言うと、人為と対立的に意識された「自然」とい  
うような「意識の在り方」は存在しない。

人為がそのように受け取られているとすると、人間の主  
体意識が増幅された現代では当然、人間の主体性が問われ  
ることになるであろう。

## 【六】〈なる〉

そこで次に、日本語の根源的発想における「主体〔性〕」  
について、いくらか考えてみることになるが、その前に、

そのような主体性を可能にしている「なる」について、一  
応の「まとめ」の意味もあり、簡略な一瞥は有効であろう。

以下、これまでと繰り返しになる部分があろうが、一応  
の見通しのためには止むを得ない。

### （a）「なる」

ある「こと・もの」の実現の条件として、人間主体の働  
き以外のいわば「力」が働く事態を、日本語「なる」は意  
味している。しかしながら、この規定だけでは、日本語「な  
る」を尽くしていない。西欧語の become や werden とは  
異なる契機を有しているのである。

今では「なる」は、日常ほとんど意識することなく多用  
されているので、自覚されることは稀であろうが、先に触  
れた人間のものではない「力」の働きを、人間の働きより  
はるかに高く評価し、さらには、人間はその「力」に根拠  
付けられている、生かされている、という心意が、本来の  
「なる」には籠められている。その心意は、古代にまで遡  
り、記紀などに頻出するオノヅカラとナルに見出せるもの  
である。

このように、「人間主体の力」は「ある力」に基礎づけ  
られている、と受容する根本的立場が考えられるとすると、  
その一つを〈おのづからなる〉の世界とする。

「なる」は、通常「作為意識」と言われている（「人間  
ないし己がする」という自意識）に空白があることである。

〔以下簡便のために作為の語を使用する〕

「なる」は、「作為意識」そのものを変質させていく可  
能性を持つ。それも正負両方向に。一つは、「作為意識」  
を「忘れ」て、それから解放され自由を得ること〔無私〕  
であり、もう一つは、己の「作為意識」を混濁させて、己  
の責任を取らない方向へ墮して行く。

〔付〕

ナルについては、本居宣長の説がよく引かれるが、木村  
紀子氏の（いわば「生・化・成」の三段階に解くが、これ  
は、むしろ漢語（日本書紀）風の分析的解釈である。）と  
いう指摘〔\*5〕が適切で、余り参考にならない。特に、  
「一には、無かりし物の生り出るを云、【人の産出を云も  
是なり、】神の成坐と云は其意なり」の「無かりし物」な  
ど、現在では宣長が何を意味させようとしていたのか、不  
明に近い。少なくとも日本語の発想には遠い。〔\*6〕

### （b）「なるの余白構造」

aで述べたように、日本語「なる」は、人間ないし個人  
の力が及ばない領域を、始めから認めているこころの姿勢  
である。これまで、「なるの余白構造」と名付けた仮説によ  
って、そのような「なる」の構造を検討してきた。

以下、しばらく、原理として見た「余白構造」の形態を  
いくらか考えてみたい。

日本語「なる」は、古代語ナルを祖語として、意識の範  
囲外を原理的に認めている。総てを意識で支配(control)す  
ることは原理としては認めていない。原理的には、意識の  
支配外が存在しないことは正常な姿ではなく、意識外が

「始めから」あるのが本来である。むしろそのような「空白」がなければならない。現代日本語の「自然体」などの表現にも、そのような点がうかがえる。

場合によっては意志（計画）の完遂を意図することもあり得るが、その場合、まず、完遂と受け取られるような表現は避けるのが通常であり、自分の力で、あるいはだけで完遂したとは意識しない。ということは、行動の主体が、その行為の最終まで意識と行動を明瞭に働かせていても、「己だけの」行為・行動は完成しない、すなわち未完成である、つまり己の働き以外の働きが不可欠であると自覚している。すなわち、人間主体が、その主体性を「世界」に対して、あくまで主張実行しようと意志するものではないことに注意したい。

以上のようなことから、人間主体が自己の意志を明瞭に意識して行為したということ自体があらわになること、つまり人間の意志があらわなことで、人間の行為の跡が明白なこと、を嫌う傾向にあると言えよう。これは人間のその行為が、〈おのづからなる〉働きから離れている、と受け取ることによる、と考えられる。言い換えれば、それは、〈なる〉の働きを無視しているか軽んじている、つまり何らかの程度で〈なる〉から離れている、さらには反逆している、ないし、その方向への道を開いていると受け取られ感じられているのである。端的に言えば、〈おのづからなる〉働きへの畏敬の念を欠くことに対する感情である〔この感情は、「そこはかとなく」「ひそやかに」「いささか」などのことばへの、いささか片寄った好みに通ずる、と考えられる〕。

したがって、ここでは、人間の意志・意識の不完全性は、「余りに意志・意識があらわなこと」を嫌うことをも意味するはずである。

それはまた、人間のみの「つくる」行為が、原理的に不完全だということを意味する。ある種の有限性の意識と言って良いかも知れない。

人間が作る物、なすことは不完全という認識とそのことの肯定、それで良い、とする心性をここに見ることができる。ここでは不完全は評価され、己のみの意志・意識の遂行は否定される。最後まで己の意志が遂行されるように見える場合は、その意志は自己のものではない、いわば〈なる〉の意志とでも言うべきもの、と意識されている。

それは主に次の理由のよっている。

〔一〕人間ないし己の「生」には、己の意志と意識の支配を超えた領域がある、との「認識」が根底に存在する。この「認識」には、感覚ないし感じの域に留まるものをも含む。

〔二〕それは、人間ないし己を、はるかに超えた働きを感受し畏敬しているからである。その働きの前では、最終的には人間は「沈黙」する。

以上は、最初に述べたように、その純粋な形態を考えたのであって、〈余白構造〉の現実において、その純粋性が完全には保持されないことは、言うまでもない。

ではあるが、「なる」という日本語は、記紀などの文献

以前から使われていたと想定されることばであって、それは日本人の心性を形成する一つの契機として働いてきたし、現在も働いている。

それは、意志しなかったこと、思っても見なかったこと、思いの外のこと、を許容している心性 とも言えよう。ではなに故に、一種の自己放棄・放心と見られなくもない「空白」を許容するのか。それを強いて言うならば、自己をはるかに超えた働きを根源的居場所としている、という「根源的感覚」が根底にあるから、という他ない〔\*7〕。この感覚は必ずしも自覚されてきたとは限らない〔したがって、惰性に陥る可能性は十分ある〕。

## 【七】主体性

以前の拙論で取り上げた例であるが、いささか加工修正して進むことにしたい。〔\*8〕

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる  
古今、秋上、藤原敏行

「驚かれぬる」の「れ」は、一般に自発の助動詞と理解されていて、「はっと気がつく」などと口語訳される。しかし、現代の自発概念を不用意に古代に適用することは慎まねばならない〔\*9〕。したがって、できる限り古代の発想に遡求して、このことばの基本的な発想という観点から、考えてみる必要がある。その一つの試みとして、非常に不十分ながら次のようなことを考えてみたい。

この歌は作者-人間主体が、自然の動き〔働き〕を感じた「応答」である、と一応理解できる。だが、それを「れ」ということばで表現した作者の発想の仕方に注目してみると、この「れ」は「驚き」が思いがけず訪れたと表現していて、作者は、「驚き」は何よりも自然の働きによるという意識を、この「れ」で表現した、と受け取ることができよう。

そう見てくると、先ほど「作者-人間主体」と規定したが、その主体の「意識外」で〔思いがけず〕「驚き」が起こったのであるから、主体は驚きの直前まで意識していなかった〔意識は働いていなかった〕ことになる。すると、この場合は、真の主体は「風の音」と見ることもできる。ここでは、風の音は驚きの「きっかけ」の域を超えている。すなわち、この歌の表現は、作者の自意識外が主導するとき表現であり、以上のような解釈を可能にしている。そして、この表現は、たまたまそういう姿を取った、と言う事情ではなく、ある根源的な発想からのものである。

したがって、全く異なる根本的発想の下では、以上の理解は成立しない。例えば、あくまで作者の作る意識を第一義とする発想では、「思いがけず」「意識外」は、作者-主体にとって二次的な契機でしかない。風の音は「きっかけ」に過ぎない。

例えば、オギュスタン・ベルク氏は次のように言っている。

「日本文化では、論理も主体も、世界から独立しては自分を主張できない。」

「〔西田幾多郎の〕場所とは結局のところ知覚に対し、ある時偶然に提供されるものに他ならず、それとの関連で主体は自らを適応させるのである。」〔\*10〕

これに対して、ここでは、「驚き」は、作者主体にとって、「思いがけず訪れた」一次的なもの、言い換えれば、主要な契機であり、自然の働きによるのであるから、それは自然の働きそのものである、と言ってもよい。この立場からすると、先のベルク氏の理解は、日本に対する「誤読」と取られよう。いかに鋭い刃でも、相手を間違えば鈍刀になる実例である。

しかし、ここで注意すべきは、「自然の働き」という語句を使ってきたが、現代の我々が想定するような抽象度の高い概念を、作者が抱いていたわけではなく、個々の具体的な事物にその働きを感受していた、と考えられる。したがって、この歌では、風の音であり、それを感じたことであり、驚きである。すなわち、風の音だけではなく、風の音の感受も、それに驚いたことも、自然の働きとして受け取られている、ということである。つまり、この「驚き」は、〔いわゆる「主観」として〕作者だけに属することのようには、意識されていない。

したがって以上の事態を、現代の用語で言うと、ここでの「主体性」は、西欧を出自とする主体性とは異なった在り方にあり、そこから、論理による自覚というより、感性の域での感受という事態、というような一応の区分でくくることになるのか。

そこで、意識の在り方という観点からみると、主観と客観が対立して、あくまで主観が主であるという構造にはないのであるから、主観は「常に」意識の「外」〔客観〕に開かれており、自閉状態にはない。それはまた、〔自〕意識が全体を支配する、ないし、しようとする事態にはなく、〔自〕意識に空白がある、ということである。

すなわち、これは〈なるの余白構造〉の一例と考えられる。先に〈「驚き」は、作者主体にとって、「不意」に「訪れた」一次的なもの、言い換えれば、主要な契機として受容されていて〉とした所以である。したがって、「おのづから」の語は使われていないが、「おのづから驚く」と解することができる。

要約すると、風の音、聴感覚、驚き、これらは同じ働きの具体的顕れ、という構造になっている。少なくとも、作者には区別する明確な意識は無かったであろう。それは、現在普通に考えられるような作者意識〔主体意識〕とは異なった在り方である。

現在の常識からすると、特異に見えるであろうこの「ころの構造」は、単に古代に留まらずに、現代にまで生き続け、もはや、弱体化してはつきりと意識されることはまれであろうが、ころのどこかの層でまだ活動している、ということを指摘したい。

朝、窓を開けて空を見上げ、「ああい天気だなあ」と、思わず口にする、この日常茶飯事は、そのもっとも身近な

ごく普通の例である。この時、外部世界に留まらず、それを口にしたころも、「いい天気」なのであり、「ころ」は家の外に出ている。

このように、われわれは、自分が思っているほど、自分の主人公ではないのである。

## 【八】なるようになる

〈なる〉すなわち〈おのづからなる〉は、生き方・生活の仕方の理想をも表していて、前述のごとく、多くの場合、現実には純粋な姿では中々実現しがたい。それだけでなく、この心性が原因で負の方向へ働く場合もある。そのような有り様を、現代の「なる」の用法で、一瞥を試みることにしたい。

〈おのづからなる〉の世界においても、人々の長い間に渡る日常生活の積み重ねからくる「惰性」によって、徐々にその意識が薄れていき、心性がほとんど無自覚な「習性」に化していく過程が考えられる。ごく卑近な「なるようになる」はその習性化の一例である。

そこで、「なる」を含む日常のありふれた表現の検討で、そのあたりの消息をいくらか伺うことは、簡便であろう〔これはあくまで「ことば」の表現と発想による検討であって、社会的政治的経済的などの条件は、ここでは顧みない〕。

ことわざにも見ることはできるが、もっと日常性の強いものとしては、

「なるようになる」

「なるようにしかない」

「なんとかなる」

「なんとでもなる」

「なるに任せる」〔本人次第〕

などが先ず挙げられよう。

個々に少々見ていくと、

「なるようになるので、どうしようも無い」の「なるようになる」には、個人の能力や意志の届かない物事の必然性の意識があるであろう〔この必然性の意識は、どの表現にも何らかの程度で秘められている〕。これは否定的用法の「なるようにしかない」に通ずる。しかし「なるようになるので諦めてはいけない」という表現は稀であろうが、希望的観測の趣きがあるにしろ、いくらか肯定的に事態を見ていて、プラスの色彩を帯びている。

「なるようにしかない」も、同じく「なる」を二つ含むが、最後は「ならない」という否定表現であるから、ほとんど否定的に使われているが、「なる」と予想されている事態と反する事態が願われている場合、例えば、大病の患者に向かって励ます時に、「なるようにしかないから、そんなに心配しないで、先生を信頼しよう」という表現は、プラス方向を期待する表現になるから、この「なるようにしかない」も、まったく否定的とばかりは言えないであろう。



「なんとかなる」は、

なんとかならせよう、なんとかなるようにしよう、なんとかなるかも知れない、なんとかなるから頑張る

など、「そうなる」ことは難しい、という否定的判断を秘めていることが多いであろうが、一応プラス志向を鼓舞する表現と理解できる。

「なんとでもなる」は、「なる」の持つ「必然性」にいわば反逆しようとする志向が伺われ、否定的には使われないであろう。

「なるに任せる」は、「なるに任せて、君自身は頑張れ」などは、事態は本人に任された本人次第である。現在は、「本人次第」という言い方が普通かも知れない。日本語大辞典には、《日本語での特別な意味》物事の成り行きにまかせることをあらわすことば。「本人次第」とある。〔\*11〕

次は小説の一節であるが、検討した日常語類は出てこないが、「自然に」「成りゆき」「まま」が近接して使われていて、〈結局は「なるようになる」し「なるようにしかならない」〉という思いが底に秘められていると見られる。

「食事をすませてから湯に入り、お茶どきに母の呼ぶ習慣の時間の来るのを書斎で待っている間も、彼は、初めに母に云い出す言葉を一寸考えてみた。しかし、ひとり考えた通りの切り出し方は出来そうにも思えず、そのときの成りゆきに任せ自然に唇が動くままにしたいと思って彼は気を沈めるのだった。」 横光利一 『旅愁』 〔\*12〕

ここには、「かすか」にしか表に現れないが、楽天性を見ることも可能かも知れない。見方によっては、この楽天性は無責任である。

以上ごく簡略で不十分な点検に過ぎないが、いわば「表通り」の理解を出ないであろう。しかし、多くは「裏通り」があって、積極的な姿勢の可能性のある「なんとかなる」にしても、無責任な態度に落ちこむ可能性は大である。

例えば、「腕を組んだ」姿勢を取り、努力を惜しみ自分は手を下さずに、「自然にそうなる」ことを期待する。「決心」もそういう気に「なる」ことを「待つて」いる。この場合、「自然になんとかなる」との表現もあろう。この「自然に」は「おのづから」に似て非なるもの、すなわち疑似「おのづから」である。ただし、「似て」いる場合は、「おのづから」を利用していることからくる。

ところで、「なるようになる」には、神島二郎が戦後政治について1968年に書いた論文がある〔\*13〕。そこでは、戦後二十数年の日本政治は「なるようになる」仕方に進んできた、と指摘していて、この論文に限らず、神島二郎は日本人の発想と生き方に役割を果たしてきた「なる」に注目している。

神島二郎が先の論文で引用している青島幸男作詞の「黙って俺についてこい」〔\*14〕の第一連は、

「銭のない奴ア 俺んとこへこい 俺もないけど 心配すんな 見ろよ青い空 白い雲 そのうちなんとかなるだ

ろう」

とあって、神島二郎は「庶民の政治的自画像」としている。この歌、あとに同工異曲が二連つづくが、見ようによっては「無責任」であり、また見方を変えれば、「なんとか」前向きに「なる」うとする「庶民」のたくましさ〔楽天性〕かも知れない。

それこそ「なる」は、「なるようになる」面を持っていることばと言えようか。日本語「なる」のしたたかさであろう。

以上は、ごく普通の現代用法の「なる」から見た、日本語「なる」の様相のほんの一端に過ぎないが、この非常に不十分な分析でさえ、「なる」の捉え難さが露呈している。と同時に、「なる」ということばは、肯定的方向と否定的方向の両契機を内蔵していて、どちらにも「なり」得ると、言わなければならない。

その特別な例として、いわゆる今西進化論の中核と考えられる「生物はおのづから進化すべくして進化した」は、見方によっては、「なるようになる」である。〔\*15〕

## 【九】「自然のみ」

〔七〕で述べたごとく、「われわれは、自分が思っているほど、自分の主人公ではない」とすると、改めて日本語「つくる」の概念内容も問題となるはずである。既に〔二〕の冒頭で、〈「つくる」の本来は「なる」とする発想〉に触れたが、「なる」と「つくる」の関係をそのような視点で、これまでの拙論において検討してきた。それらの検討では、キリスト教精神圏での「つくる」と対比して考究した。

概略的に言えば、西欧圏の「つくる」は、全能の神の創造行為の「つくる〔創造〕」から来る概念であり、信仰に支えられている限り、神の「つくる」が第一義であるが、その信仰が表から退くに つれて、それは人間主体の「つくる」に変質していく。それは、いわゆる「近代」の個人主義と主体性意識を産み出す大きな要因の一つと考えられる。

そこで、いささか図式的の感は免れないが、「自然のみ」を、以上の関心の元で考えることにしたい。

ユダヤ・キリスト教の伝統を、慣用によってヘブライズムと呼ぶと、ヘブライズムにおいては、根源は「超自然」であるから、「根源としての自然」という概念はなじまない。

神—人間—自然〔厳密にはこれは日本語の自然ではない〕の系列の「自然」、すなわち創造者としての DEUS が原動力である「自然」は、人間と同様「無」から創造されたものであり〔creatio ex nihilo〕、「神の国 Civitas Dei」と対立する「この世界」では、「自然」も人間同様「救われるべき」状態にある。したがって、回復されるべきもの〔\*16〕として存在していて、神の似姿〔Imago Dei〕でもある人間にとっては、いわば「異邦人」の側面をも持っており、侵入者として、人間とその社会に「無秩序」「混沌」をもたらす。

この意味の「自然」は、人間にも分与されている契機であり、その限りでは人間も秩序を破壊する可能性がある。

先ほどと逆に見ると、人間は「自然」にとって異邦人であり侵入者であり得る、ということになる。例えば、いわゆる「環境問題」を産み出している「近代」の一面である。

以上のような発想は、西欧文化圏において、一つの大きな流れとして見え隠れしつつ存在し続けてきた。

これに対して、「根源としての自然」を受け入れる在り方を考え、その一つの例としての〈おのづからなる〉を課題としてきた。

この〈おのづからなる〉の世界では、たとえ一時的にでも「混沌」「無秩序」のように見えたとしても、「落ち着いて」いられるのは、人間に関わりなく、世界そのものが秩序であると信頼しているからである。しかし、人間とは無関係ということではなく、それどころか、根源的に「支えられている」との「信頼」が可能にしている世界の秩序である。

したがって、ここでは〈自然〉が原理であり、当然人間存在を超越している。ヘブライズムと対比した相対的な表現になるが、「超自然」を欠くそれを端的に言うに「自然のみ」となる。そしてこれが肝心であるが、超自然と対をなすところの「自然」と「自然のみ」の「自然」とは、根本においては全く異なる二者である、としなければならない。〔＊17〕

「自然のみ」では、人間の根源的な「在り方」を「自然のまま」とする心性が働いている。そうすると、その「自然のまま」の内容が問われるが、これまでこの「自然のまま」の内容が思惟によって厳密厳格に問われることはほとんど見られなかった。むしろ、知性というより感性で受け取ってきた傾きが強く、その表現は様々な姿を取ってきた。だが、一定していないからといって、「自然のまま」を希求するところそのものも定まっていない、という事情にはない。「自然のまま」を希求する結果の表現は、個々にはさまざまな姿を取ったとしても、その希求そのものは長く継続してきた。これを心性と言い換えてもよいであろう。そして、このいわば「自然を希求する心性」の一つとして、「おのづからなるの余白構造」を提案してきたのである。

ところで、「自然のみ」は現代の用語では、一つの「自然観」とされるであろう。日本人の場合、この「自然観」はそのまま「人生観」であり「生き方」である〔＊18〕。

〔したがって、筆者は、この「自然観」という言葉は、日本人の場合には適切ではない、と考える。〕

また、別の表現を取って、この「自然観」をこころの根源的居場所〔＊19〕にしている、と言ってもよい。「自然のまま」はそのような「こころ」を表したことばと言えよう。また、意識的な次元〔自意識〕では、「自然のまま」は、生き方、生活の仕方の理想をも表しているのである。

〔付〕

ただし、「自然のみ」は「秩序」をもたらず、としたが、「自然」に全くそれと反対の作用を見ていないかという、

風土記のアラブルカミの「半死半生」〔＊20〕などにも顕れているように、否定的な契機に対する感覚も存在することに、注意しなければならないであろう。さらには、「自然」への畏怖の感情も課題とすべきであるが、今回はその検討の余裕がなかった。しかし、「自然」が人間や人間社会を破壊する、という考えないし感情は全く見られない、ということと言えるであろう。

## 【十】いないいないばあ

記紀などの古代文献にも見られるように、〈おのづからなる〉働きは、つねに実感され、表現されているわけではない。ある時ある場所でいわば「突出」して意識される「時」があり、それが「おのづから」と意識され、表現される。

〔三〕において、「おのづから」との表現をさせる理由がある、と既述した。その理由にしても、明白に意識されている場合の多くは、神威や天皇の威力などであるが、その理由が表現者にも不明である多くの場合は、その突出の条件ははっきりしない。もともと、厳密に言えば、神威によると意識された場合も「突出」の条件が明確とは限らない。

しかしながら、「その時」「その場」だけに〈おのづからなる〉働きが作動するのではなく、原理としては、常に働いている、との理解は合理的である。

すると「突出」は、

〔1〕〈おのづからなる〉働きが強く発動する時がある。

〔2〕人間の側の条件によって、特別に強く感じる時がある。

のどちらかであろうか。

ただし、この二つは、局所的、すなわち「ある時」「ある場所」に限定される。

この「突出」の問題は簡単なようでいて、結論を先に言えば、よく分からないところが残る。そこで、いわば直球ではなく変化球で近づく試みという迂遠な道を取ることにした。

便宜的に二つの譬えを使用する。

ごく卑近な例で恐縮だが、赤児をあやす「いないいないばあ」に譬えると、実際の「いないいないばあ」は同一人物が「居なかった」り「居た」りするので、「居ない」原因はその人にある。では〈おのづからなる〉の場合は、というと

〔一〕「いないいない」も「ばあ」と同様に〈おのづからなる〉働きからくる。この場合は、その理由は不明だが、〈おのづからなる〉働きが、あたかも沈黙して人間からは「隠れて」いる時があり、「ばあ」は〔人間に感受可能の意味では〕常住ではない。したがって、「ばあ」は「突出」を意味しよう。

〔二〕「いないいない」は人間の側に原因がある。この場合は、いつも「ばあ」であるのに、人間が「いない」にしているのであるから、「突出」は人間の側の条件によることになろう。

この〔二〕の理解は、例えば『三冊子』の土芳の言う「私



意」に近いかも知れない〔＊21〕。要するに、この〔二〕は、人間の側のいわば受信感度の問題である。もっとも、〔一〕にしても、「おのづから」の突出を、「誰でも」受信できるわけではない。

そうすると、問題は人間の受信能力に移っていく。

この二分法はいささか無理があり、実態はもっと複雑であろう。そこで、この微妙な問題、とりわけ先述の「受信感度」を考えるために、さらに第二の方法として、仮に、〈おのづからなる〉働きを磁場に働く磁力のようなものと仮定すると、〈おのづからなる〉世界は磁場ということになろう。

己の内外に〈おのづからなる〉働きを受信できる人間が、ある時ある場所に「登場」とすると、その働きの磁力は強力に受信される。それに表現が伴う場合もある。

その「登場人物」の一人は芭蕉である。

また、別のそのような表現の一例として、志貴皇子の歌を挙げたい。

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりける  
かも 万葉集 巻八 1418

管見では、〈おのづからなる〉という中核の発想の、異例に近いほど意識化・自覚化された形態を、芭蕉に見ることは可能である。いわば強調され顕在化された姿を見ることが出来る一例である。この意味で「なるの論理」追究には好都合であり、これまで幾つかの拙論で資料としてきた所以である。（もっとも、それは主に山本健吉の芭蕉理解によっているかも知れない。〔＊22〕）

因みに、この強く意識化された形態の要因として、西行に比べて「自由」を未だ獲得していない、例えば、西行の旅はおのづからなるものであるが、芭蕉の旅は意識的・意図的なものである、とする山本健吉の見解に従うと、そのような点も、その一因となっている、と考えられる。〔＊23〕

〈師のいはく「乾坤の變は風雅のたね也」といへり。靜かなる物は不變のすがた也。動ける物は變なり。時としてとめざれば、とゞまらず。止むるといふは見とめ聞きとむる也。飛花落葉の散りみだるゝも、その中にして見とめ、聞きとめざれば、おさまるとその活きたる物だに消えて跡なし。

また句作りに師の詞有り。物の見へたる光、いまだ心にきへざ

る中にいひとむべし。〉 『三冊子』

「飛花落葉」の「活きたる物」は常時存在する、との解釈も可能な文面であろう。人間が「見とめ聞きとめ」られないだけだ、ということである。これはやはり〔二〕の場合に属しよう。

だが、芭蕉は、「どうすれば」確実に光が見えるかについて明確なことを言っているか。ただ、「飛花落葉」の「活きたる物」に出会った「初め」の「見とめ聞きとめ」が肝

心要だ、と考えているようである。これは、その時の「見とめ聞きとめ」が、ただ一回だけという覚悟に裏打ちされて、始めて可能になる、と思われる。そうすると、芭蕉は、長く苦勞の多い修行の果てに、訪れるかも知れないこの「一回のみ」が、「光」が見える道を可能にすると考えていたのであろうか。〔＊24〕

土芳は、この「見える道」を塞ぐものは「私意」とだけ考えていたふしがあるが、あるいは芭蕉と微妙にずれていたかも知れない。

〔一〕では、[その理由は不明だが、〈おのづからなる〉働きが、人間からは「隠れて」いる時がある]としたように、その「隠れ」は理解の彼方である。

そうすると、「ばあ」の常時も時々どちらにしても、人間側の問題である、と理解するしかないようだ。

結局、「いないいいない」は、人間の側の条件によると理解すると分かりやすいにしろ、理由不明の「隠れ」の可能性が考えられ、「ばあ」の条件は、今のところ、説明がつかないところがあつて分からない、という他ない。

それは、〈おのづからなる〉働きというのは、人間側の「根源」に対する応答の一つであり、それに「根源そのもの」が、どのように関わっているのかは、人間には分からないことからくるのかも知れない。しかしながら、この人間の応答には、「根源そのもの」の影が射しているであろうことは、十分考えられるのである。

## 【十一】沈黙

オノゴロジマ〔シマ〕は記紀の冒頭に出てくるが、ここでは古事記で見ていくこととする。この条には、「多陀用弊流」「許々袁々呂々迹」「淤能碁呂島」の三つの音注が付されていて、古事記作成期よりかなり古い重要な伝承と推察される。

「二柱の神、天の浮橋に立たして、其の沼矛を指し下ろして晝（か）きたまへば、鹽許々袁々呂々迹（こをろこをろに）晝き鳴して引き上げたまふ時、其の矛の末より垂り落つる鹽、累なり積もりて島と成りき。是れ淤能碁呂島（おのごろじま）なり。」 記上巻

記には淤能碁呂島と自凝島の二例。「淤能碁呂島」とわざわざ音を表示しているのが、オノゴロジマ〔シマ〕の訓は確かで、オノはオノヅカラのオノであり、ゴロは「自凝島」という表記から明らかなように「凝る」であろう。

参考として、二家の注釈を見ると、この条に対する宣長の注は、

「自（オノ）と云所以は、他の嶋国は皆二柱ノ神の生成賜へるに、此嶋のみは然らず、自然（オノヅカラ）に成ればなり。」とある。〔＊25〕

山田孝雄の詳密な『古事記上巻講義』では、この宣長の説を肯定し、「オノゴロ」は「ひとりでにできた」という意味としている。〔＊26〕

以上二家ともに、さりとて通過しているように見える。

原文に戻ると、「自凝島」の「自」も、オノヅカラの意であり、ミヅカラではない。さらには「島と成りき」は「オノヅカラ島と成る」であることに注意したい。したがって、この条にオノヅカラが使用されていなくても、その意は含まれている、と見てよいであろう。

さて先の引用文の直前は、

〈是に天つ神諸（もろもろ）の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「是の多陀用弊流（ただよへる）國を修め理（つく）り固め成せ。」と詔りて、天の沼矛（ぬぼこ）を賜ひて、言依さし賜ひき。〉とあって、この条の「オノヅカラ」は、「天つ神」の意向を、二神が実行していくその最初の場面でのものである。

そうすると、神代紀上 第一段の一の「一書に曰はく、天地初めて判（わか）るときに、一物（ひとつのもの）虚中（そらのなか）に在り。状貌（かたち）言ひ難し。其の中に自（おの）づからに化生（なりい）づる神有す。國常立尊と號す。」のオノヅカラと共に、この世界出現の初段階でのものとして、特別に根源的な働きを示すオノヅカラと理解できる。

ではこの「根源的な働き」の主体は何か、という問が当然現代の発想からは、出てこよう。そこで、オノゴロジマの原文に戻って考えると、現代の理解の仕方からは、「垂り落つる鹽」ひいてはオノゴロジマが、ナルという動詞の主体のように見えるかも知れない。

しかし、オノヅカラナルところの働きの主体では決していない。この点について以下少々考えることにする。

それでは、何が働いているのか。その働きの具体的な主体は、表に顕れず、といって隠れているとも言えないが、その働きの現れは明々白白である。つまりは、この働きから独立した、西欧思想における *substantia* (*substance*) [実体] ではもちろんないにしても、そのような類が想定される事態ではないのである。では、この事態をどのように考えればよいのであろうか。

カミがこの働きの主体、という考えが先ず浮かんでくるかも知れないが、そのカミも、最後まで自分の意志を通す存在ではない。アマテラスでさえ、名が不明の、和辻哲郎の用語では「不定の神」[\* 2 7] に、神意をウラナフ[問う]のである。

次に、〈「内在せる力」に依って展開した〉[山田孝雄] [\* 2 8] という類の、固有の力との考え方があるが、筆者は、そのものが持つ固有の力[能力]というような考えが、果たして古代にあったか、疑問に思う。

筆者としては、ここには働きの主体に対する関心が見られないか弱いことと、これに反して働きそのものに対する関心がとりわけ強いことに注目したい。このことは、上記のノゴロジマの条に留まらず、古代文献の表現において指摘できる点である。

そうすると、ただひたすらオノヅカラナル働きに驚異し畏敬し受容[信]する「ところ」から、オノヅカラナル働きに依ってオノヅカラナル働きの現れる、と表現した、と

の理解も可能と考える。そこでこれを、同語反復の表現あるいは発想と仮に名付けることにしたい。付言すると、オノヅカラナル働きへの畏敬としたが、その本来を考えると、オノヅカラナルという表現自体が「根源」への畏敬を表しているのである。

同語反復の形でしか表現しなかった、あるいは出来なかった古代人のところを思いみると、人間が根源に対して取りうる根本の態度の「一つ」として、根源をオノヅカラナルと直観し、「オノヅカラナルはオノヅカラナル」と「ところ」で受け止めた、と想定する。[\* 2 9]

そしてさらに、この事態は、古代のところが「根源そのもの」に向かって「沈黙」したことをも語っている。[\* 3 0]

したがって、オノヅカラが同語反復の表現を取り、古代日本人が、根源の前に「沈黙」した、ということはまた、オノヅカラもナルもことばでは表現できない、すなわち「定義不可能」を意味する。

言い換えると、この「沈黙」は、ことばによる表現を超える「何もの」かへの、ある種の感覚を語っている。それは、わずかに、オノヅカラナルとしか表現しなかった「感覚」である。

以上のオノヅカラとナルについて述べたことは、古代語に限ることなく、「おのづから」と「なる」にも言えることである。

ここで「沈黙」について付言すると、「なる」が、意識・意志に空白部分があることを意味することからすると、この「空白」をも「沈黙」と解することは可能で、やがてそれは根源そのものへの沈黙として理解できる。

ただし以上は、あくまで作業仮説かつ概念である。[\* 3 1 循環論法]

さらに、この定義不可能ということ、改めて考えてみると、「おのづから」や「なる」の「意味」とされているものは、「おのづから」と「なる」の軌跡であって、本体はことばでは捉えられない、ということになろう。筆者のつたない追究も、仮説に仮説を重ねて、「跡」を追っているに過ぎない。

## 【付】問題意識の在り処

【九】で「なる」が正負両方向への可能性を内蔵していることを述べたが、「沈黙」も同じ事情にあらう。

筆者が追求してきたような、これまでの日本人の心性を、強く否定し、克服すべき「欠点」と見做す見解があることも知らないわけではない。[\* 3 2]

そこで、最後に筆者の問題意識の在り処を簡単に述べることにする。

〈おのづから〉も〈なる〉も、「根源」に対して、人間が取り得る根本姿勢の「一つ」である。「一つ」としたのは、この「姿勢」ないし「受け取り方」は、一つに留まらないと考えるからである。

各姿勢〔それが作り出した文明・文化〕は独特の発想の仕方をしていて、さらにそれぞれ特異な偏向を持たざるを得ない。西欧が作り出した「近代」は、普遍的として全世界に普及して行ったが、この「普遍」にも偏向があると見なくてはならない。これには強い異論があろう。

「なる」「おのづから」に、それとは全く異なる根本的発想から作り出された概念と方法で接近することは、対象にふさわしい仕方ではない。先ず、概念や方法の「偏向」に注意しないことが多い。多くは、「偏向」に気づかないか、気づいても「根源的」とは見ずに、結局は無視するか、のどちらかである。

したがって、「なる」「おのづから」にも偏向があるとしても、「なる」「おのづから」自体の発想から理解することが、先行すべき主要な作業と考える。

それは、地球規模の「文明」の課題の道への、われわれの足下の反省でもある。

さらにそれを全地球規模の文明の問題としたとき、一つの「解毒剤」として、「原始人に無くて現代文明人にあるもの、子供に無くて大人にあるもの、共に第一義ではない」とする考え方を提案したい。

## 【補】

### （ア）一つの思考実験

〈おのづからなる〉の世界からの理解として、思考実験の一例を挙げることにしたい。

自身の根源である自然から離れることによって、人間的な意識が生じ、自然との「すきま」を作ってしまった人間は、そのすきまを埋めるために意識を使用する仕儀に陥った。「不自然」を脱するためには、意識という不自然を働かさざるを得なくなったのである。

そう考えてくると、〈余白構造〉において、意識は不自然（さらには反自然）な状態を脱して自然を目指し、自然に戻るように要請されているのは明らかである【【二】盆栽 参照】。すなわち、不自然な意識から「自然な意識」へ〔意識の不自然から意識の自然へ〕、それはもはや元の自然のままではあり得ないかも知れず、新たな形を目指す「自然」と「意識」である可能性すら考えられる。

### （イ）「みづから」と自発概念

「おのづから」と「みづから」という対で問題にされ論じられることが多いが〔＊33〕、少なくとも古代日本語に限っても、予想されるほど、「みづから」の語の重要性は大きくない。それが古代に限らず、「おのづから」の対応語として、重要性を帯びるように見えるのは、現代の「自発」概念に起因するところが大きい。筆者自身も以前の拙論で、「自発」概念を採用してきた反省から気づいたことである。少なくとも過去の日本人の基本の発想としては、「みづから」は「おのづから」の域には遠く及ばない。したがって、本小論においては、あえて「みづから」を主題

としない。

さらに、現代の自発概念は便利な概念で、適用した後は、適用の対象を離れて概念が一人歩きし、対象から外れてしまう危険性がある。

要するに、「みづから」に留まらず、日本語「おのづから」に、余りに抽象度の高い精密な概念で接近することには、危険性があること、対象を破壊しかねないことを肝に銘じなければならない。

自戒をこめて、「おのづから」も「なる」も一筋縄ではいかない日本語である、と改めて言わなければならない。

（ウ）丸山眞男と神島二郎の二人の先人には感謝をささげなければならない。

ナルについての基本的文献は、丸山眞男の「歴史意識の『古層』」1972 であることは言うまでもない。広く一般に、「なる」という発想に眼を向けさせた功績は丸山眞男のものであろう。

すでに参照引用した論文に留まらず、『新版 日本人の発想』講談社学術文庫版 1989.3、特に第二部「1 ナルということ」でも、神島二郎は日本人の「発想」における「なる」の重要性に眼を向けている。「なるの論理」という表現も使用している。

## 【註】

記紀以下の古典文献は、断らない限り、岩波古典文学大系本に依る。それは、国文学研究資料館が大系本をデジタル化したものをも利用したからである。引用の仕方は、訓読本文を主とする。原本の訓で必要と思われるもののみ（）内に記す。

国文学研究資料館：<http://www.nijl.ac.jp/>

- 〔1〕 become や werden の辞書での主要な訳語には、「なる」が含まれるので、うっかりすると同じ位相にある語と受け取られ易いが、英語ドイツ語におけるそれらの語のいわば「地位」と、「なる」のそれとは全く異なることに留意しなければならない。
- 〔2〕 「笈の小文」 校本 芭蕉全集 第六巻 75 頁〔富士見書房 平成元年 六月 初版〕による。
- 〔3〕 時代と場所が異なる事象に、現代の感覚で接する姿勢には危険性があることは、周知のことはずだが、例えば、古代ギリシャのデュオニソス祭儀に、「文明人」の勝手な思いからくる、「残酷」などの形容詞を付することは間違いである。
- 〔4〕 『遠野物語拾遺』245 〔平成十六年 初版の『新版 遠野物語』 角川文庫による〕
- 〔5〕 『原始日本語のおもかげ』 木村紀子 平凡社新書 20 に 09.8 初版、p.67
- 〔6〕 筑摩版『本居宣長全集』第九巻 古事記傳 一（古事記傳三之巻）一二四頁



- [7] 根源的居場所については、前記「方法論の私的試みⅡ---なるの自覚」の【3】を参照されたい。
- [8] 「古代日本語ナルについて」『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.20 No.2、1997 (9) 節
- [9] 末尾の「補」の「イ」を参照されたい
- [10] 『空間の日本文化』オギュスタン・ベルク ちくま学芸文庫 2010.6 第八刷 p.48、p.49
- [11] 小学館『日本大百科全書』CD 版付属の『日本語大辞典』による
- [12] インターネット『青空文庫』の『旅愁』による
- [13] 神島二郎「日本人の政治意識」『現代日本の政治』〔講座 日本の将来第二巻 1968 刊 潮出版社〕所収
- [14] 1964 年発表、近年 2010 年代になって、歌手天童よしみが取り上げているようだが、その社会的政治的分析は、神島二郎ならぬ筆者の能力を超えている。
- [15] 『自然学の提唱』『増補版 今西錦司全集』第十三巻所収 1993.8、p.13；講談社学術文庫版 1990.10、p.22
- [16] 例えば、40 年以上日本で宣教師として、また学者劇作家としても活躍した、「日本のこころ」「自然のまま」〔両語とも本人の表現〕に、キリスト教徒としては、例外に近いほど深い理解があったホイヴェルス神父は、次のように語っている。  
 〈「自然」の無邪気さ\*だけではキリストの存在を無視してしまうことになる。Gerechtigkeit が必要であって、それを満たすキリストを通して自然が完成されるのである。〉『ホイヴェルス神父－信仰と思索』土居健郎 森田明編 聖母の騎士社 2006.3 6 刷 p.121 \*この〈「自然」の無邪気さ〉は、神父が「日本のこころ」を表現するとき使用する。
- [17] 「方法論の私的試みⅡ---なるの自覚」『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.33 No.2、2010 【4】「Kant と Rudolf Otto」などを参照されたい。
- [18] 『俳句の世界』「即興と眼前体」、山本健吉全集八 p.158 下〔昭和五十九年四月 初版〕、芭蕉の「造化」を論じて、「造化」は「自然」であり、それは芭蕉の人生観、生き方である、とする箇所は参考になる。
- [19] 註7 参照
- [20] 風土記には、通常「交通妨害」のカミとされている、多くの人の行き来する場所に在って、「半は死に、半は生き」などの表現を伴うアラブルカミを多く見る。
- [21] 〈「私を忘れる」ということ〉『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.36 No.2、2013 〔六〕の〔二〕を参照されたい。
- [22] 特に、〈「軽み」の論一序説一〉〔山本健吉全集八所収〕は、〈なる〉〈余白構造〉の理解に資するところ大きい。
- [23] 特に、同上所収『漂白と思郷と』〈「軽み」と「重み」と〉
- [24] 『三冊子評釋』昭和四十五年 能勢朝次の上記引用箇所に関する見解は参考になる。
- [25] 前掲 古事記伝四之巻、全集9 一六四頁。
- [26] 昭和十五年二月 國幣中社 古事記研究會 発行 非売品 (国会図書館所蔵本で参照) p.118f
- [27] 和辻哲郎『日本倫理思想史 上』第一篇第二章 全集12
- [28] 山田孝雄、前掲 p.30。もっとも、これは山田孝雄のナル一般についての見解で、「日本語で云ひあらわすのに困難であるから漢語を以て言へば」としていて、ナルの内実の表現しにくいことも述べている。
- [29] 残された表現では、日本書紀の「造物」だけが「オノヅカラナル」と訓まれている。しかし、「オノヅカラ」が「ナル」に掛かっている、と見られる少数の例はある。
- [30] 「アシカビについて」の【6】『東京工芸大学工学部紀要』人文社会編 Vol.30 No.2、2007
- [31] 丸山眞男は、その「歴史意識の『古層』」1972 筑摩書房日本の思想6 所収 (丸山眞男集第十巻所収) p.5 下で「一種の循環論法」と断っているが、この探求・探究は、今のところ、資料と己の心との相互交渉以外に方法はない。ただし、己の心ということで、丸山眞男と少々違いはあるかも知れないが。
- [32] 極く最近目にしたものでは、『セレクション・竹内敏晴の「からだと思」4』2014.5 初版の p.31～36、2003 年の木田元氏との対話
- [33] 近くでは  
 『「おのずから」と「みずから」のあわい 公共する世界を日本思想にさぐる』竹内整一 金泰昌 編 2010.6  
 『「おのずから」と「みずから」 日本思想の基層』竹内整一 2010.8 増補版初版